第五回　平成二十一年九月十九日

インド社会の変ぼうと世捨て人の戦略

村瀬　智

一　はじめに

わたしがこの四半世紀にわたって追いかけている研究テーマは、インド文明の人類学的研究です。とくに、ベンガル地方の「バウル」とよばれる宗教的芸能集団に焦点をあてて研究をすすめています。

インドはいくつもの顔をもった不思議な国です。日本人にとってはとくにそうかもしれません。インドと聞いて、ある人は「お釈迦様と仏教のふるさと」を、またある人は「悠久のときの流れるところ」といったイメージを思い浮かべるかもしれない。団塊世代なら、ガンジーやネルーの姿を思いだすかもしれない。若い人なら、カレーやサリーを思いつくかもしれない。あるいは、ターバンを巻いた蛇使いの大道芸人が出てくるかもしれない。

それらのイメージは、どれもみな正しいのですが、インドに対して、もしそのひとつのイメージしかもてないとしたら、それは問題です。なぜなら、インド世界はいろいろな表情をもっているのに、ひとつの

表情だけを思い浮かべて、それがインドなのだと理解したら、それは間違いだからです。インドのおもしろさや不思議さは、いろいろな顔をあわせもっているところにあります。インドは万華鏡に似ています。その万華鏡の模様のような多様性のなかにこそ、インドがあるのです。そして、その万華鏡の模様のように、インドは一時も静止しない。インド社会は、歴史を通じて常に変化し動いているのです。

さて、平成二十一年度の大手前大学公開講座のテーマは、「時空を越えて　変ぼうする社会と文化」です。時代や地域にとらわれず、「変わりゆくもの」に焦点をあてて、社会と文化を考えてみようということです。

現在のインドは、一九九一年の経済改革が功を奏し、急速な経済成長を実現しています。今日の講義では、このインド社会の劇的な変ぼうに対して、世捨て人がどのように対応しているかを、ボルプール・シャンティニケータン地域のバウルを例に考えたいと思います。ビルブム県ボルプール市は、コルカタ（カルカッタ）の北西約一六〇キロ、急行列車で約三時間の距離の地方都市です。ボルプールに隣接するシャンティニケータンは、詩人タゴールが創設したヴィシュヴァ・バーラティ大学の所在地として有名です。

二　カースト制度と世捨て人

インドの社会をもっとも顕著に特徴づけているのは、カーストです。インド社会の近代化にともなって、カースト制度はずいぶん緩んできたとはいえ、いまだにヒンドゥー教徒の職業や結婚、食事などの行動を規制しています。ところが、世俗のヒンドゥー教徒の生活と密接にかかわりながら、「世捨て人」（現世放棄者）が、インドの社会的景観の不可欠の部分として、何千年も存在しつづけているという事実は意外とみすごされてきました。

古代インドでは、「ダルマ」（社会的規範）を遵守すること、「アルタ」（実利）を追求すること、「カーマ」（愛、とりわけ男女間の性愛）を交歓することが人生の三大目的とされ、この三つを充足しつつ家庭をいとなみ、子孫をのこすのがひとつの理想とされてきました。また一方では、とくに業・輪廻の思想が明示されたウパニシャッド思想以降、世俗の世界を放棄し、乞食遊行（こつじきゆぎょう）しつつ苦行や冥想によって輪廻から脱却すること、すなわち「モークシャ」（解脱）を達成することが宗教的理想として立てられました。

相反する実践を要請するこの二つの理想を、実践の時期を区分することによって合理的に調和させるために設定されたのが、「四住期（アーシュラマ）」の制度です[1]。古代から現代にいたるインド人の大多数の生き方を方向づけているゾルレンとしての生き方、人間の理想として「まさになすべきこと」「まさにあるべきこと」、それが四住期という考え方のなかに反映しています。

中世以降、神への絶対的な帰依を内容とする「バクティ」（信愛）の思想が展開し、ヒンドゥー教は大きく変化しました[11]。しかし現代においても、カースト社会に生きる世俗の人びとにとって、世捨て人は相反する生活様式を採用した人なのですが、「究極の理想を追求する人」として存在しているのです。そして世俗の人びとは、世捨て人に食べ物や金などを施与し、彼らの生存を保証しているのです。それは世俗の人びとにとって、「スヴァ・ダルマ」（本分）とされているのです。

三　バウルの道

ベンガルのバウルは、農業労働や工業生産、手工芸作業、商業活動などにいっさい従事していません。彼らは、一般のベンガル人に経済的に依存し、「マドゥコリ」をして生活しているのです。ベンガル語の辞書は、「マドゥコリ」という語を、「蜂が花から花へと蜜を集めるように、一軒一軒物乞いをして歩くこと」と説明しています。すなわちバウルとは、「みずからバウルと名のり、バウルの衣装を身にまとい、人家の門口でバウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えたりして、米やお金をもらって歩く人たち」のことです。バウルは宗教的な乞食なのです。バウルは、世捨て人のようなゲルア色（黄土色）の衣装を着て、「門づけ」や「たく鉢」をして生活費を稼いでいるのです。

マドゥコリの生活は、ひとりの人間が「バウルになる」ためにも、また「バウルである」ためにも不可

欠の要件です。これは彼らが選んだライフスタイルです。そしてこのライフスタイルそのものが、彼らが主張する「バウルの道」（バウル・ポト）の基本なのです。バウルの道とは、「マドゥコリの生活にはじまり、神との合一という究極の目標にいたる道」です。それは「人間の肉体は、真理の容器」という彼らの信仰にもとづいています。バウルの説明は実に明快です。「わたしたちは富をもたない乞食です。わたしたちの唯一の財産は、この肉体です。しかし、この肉体には神が住んでおられる。それ以上に何が必要ですか」と語るのです[iii]。

おおくのバウルが説明してくれた「バウルの道」を要約すると、つぎのようになるかと思います。・・・人は、もしバウルの道にしたがうならば、だれでもバウルになれる。ただし、バウルの道の第一歩では、（カーストの義務を放棄し）マドゥコリの生活を採用しなければならない。バウルの道の究極の目標は、人間の肉体に宿る神と合一し、神を実感することである。バウルと名のり、バウルの歌をうたい、マドゥコリの生活をするだけでは、バウルの道の半分しかすすんでいない。バウルの道の究極目標に到達するには、バウルの歌を通じてバウルの宗教をまなび、ヨーガの修行を通じて自己の心身を鍛えなければならない。そして、サドナとよばれる宗教儀礼を実践しなければならない。そのためにはグルの導きが必要である。・・・

四　もうひとつのライフスタイル

バウルに、なぜ彼らがバウルになったのかという質問をすると、十中八、九、「子どものころから歌や音楽がすきだったからだ」という答がかえってきます。しかし、個々のバウルのライフヒストリーを詳細に検討してみると、長期にわたる社会的・経済的・心理的な不満や不安を経験したのちに、バウルになったようです[iv]。

ベンガル社会の一群の人びとが、なぜバウルの道をえらんだのかを、ただひとつの要因をあげて説明することはできません。彼らがバウルになった動機には、いくつもの要因が複雑に絡みあっているのがふつうです。それらは、低いカースト身分による抑圧、慢性的な貧困、本人の意思のはいりこむ余地のない結婚に対する不安、世代間の反目、父母の別居による家庭崩壊、乳・幼児期における親の死の経験、そして異母兄弟との土地所有権や相続権をめぐる争いなど、解決できない抑圧の具体的な経験です。

このように、バウルになる動機となった要因のおおくは、カースト社会に内在している特質や矛盾に由来するようです。そして、結果として生じた社会的・経済的・心理的な不満や不安は、バウルには、「現実」であるが「耐えがたい」と感じられていたようです。カーストの地位や身分による限界、インドの家族制度や結婚制度の特性、経済的な不安定さなどに起因するこれらの社会的・経済的・心理的な問題に対する解答は、「苛酷な現実に耐える」か「耐えがたい現実から自由になる」かの二者択一です。このような状

況のなかで、わたしがインタビューしたバウルのおおくは、自分の身に降りかかった問題に対する意味ある解決策を、「文化的に是認された生活様式」、すなわち「世捨て人の生活」に見いだすことができたのです。彼らは、世捨て人の生活様式を採用することによって、人生の危機を切り抜けることができたのです。

世捨て人の生活は、個人の選択肢が制限されたカースト社会における、選択可能な「もうひとつのライフスタイル」です。「バウルの道」（バウル・ポト）は、「サードゥー」（ヒンドゥー教の出家修行者）や「ヨーギー」（ヨーガ行者）、「ボイラギ」（ヴィシュヌ派の出家行者）、「ファッキール」（イスラム神秘主義の行者）など、インド社会に存在するいくつかの「世捨ての道」（サンニャーシ・ポト）のひとつです。インド文明には、カースト制度にともなって、それと矛盾する世捨ての制度が、文明の装置として組み込まれているのです。

五　プロの音楽家の出現

詩人タゴールが、二〇世紀初頭にバウルの歌の豊潤さを世に紹介して以来、それまで「奇妙な集団の風変わりな歌」と思われていたバウルの歌が、再評価されるようになりました。タゴールの影響により、その後ベンガル人学者によって膨大な数のバウルの歌が採集され、なかには注釈つきのりっぱな歌集として出版されるようになったのです。

一九五一年、タゴールが創設したヴィシュヴァ・バーラティ大学は、国立大学となりました。大学はそれ以後、「ポウシュ月の祭典」（ポウシュ・ウトショブ）や「マーグ月の祭典」（マーグ・ウトショブ）を主催するようになりました。大学は、祭典のプログラムのひとつとして、バウルの歌の音楽会を開催するようになったのです。

このような、タゴールの影響やヴィシュヴァ・バーラティ大学の積極的な後援をきっかけに、一九五〇年代後半には、バウルの歌と音楽は、「ベンガル民俗文化の不可欠の部分」と認識されるようになりました。しかしこのことは、ベンガルのバウルの「宗教的求道者」という側面よりも、「民俗音楽家」という側面を強調することになったのです。音楽的技量に卓越したバウルは、ベンガルの上流階級の邸宅での私的な音楽会に招かれたり、大都会での祭典やラジオ・テレビにも出演するようになりました。また、バウルの歌や音楽のレコードやカセットテープが商品として販売されるようになりました。さらに、外国公演にも招聘されるバウルも出現するようになったのです。

ベンガル社会の急激な変化に呼応するように、一部のバウルは、マドゥコリの生活をやめ、プロの音楽家としての道をあゆみはじめました。彼らは音楽チームを組織し、バウルの歌を演奏会でしか演奏しなくなりました。また、音楽教室を開設し、アマチュアの音楽愛好家にバウルの歌や音楽を教えるようになりました。彼らは、契約による出演料や授業料によって生活費を稼ぐようになったのです。レコードやカセ

ットテープに録音を依頼されたバウルは、バウルの歌や音楽の商業的価値を知りました。また外国公演に招聘されたバウルは、外国人の心をもひきつけるバウルの歌や音楽の魅力に気づきました。さらに、野心のあるバウルは、プロの音楽家としての活動の機会のおおいコルカタに移住したのです。

ほとんどのバウルは、今日でもベンガルのいなかの村々をまわり、人家の門口で歌をうたったり、神の御名を唱えたりしながら、一軒一軒マドゥコリをして生活しています。しかし彼らは、コルカタに移住し、自宅には電気や水道はもちろんのこと、冷房装置や温水装置も完備し、テレビや電話、運転手つきの自家用車まで所有するプールノ・チャンドロ・ダシュのような、プロの音楽家として成功した「スター」の生活も知っています[v]。今日の若いバウルが、バウルの歌を一握りの米と交換するために人家の「門口」でうたうよりも、割に合う出演料や気前のよい祝儀が期待できる「舞台」でうたいたがるとしても、それは当然です。そして彼らの関心が、宗教や儀礼に精通したバウルになることよりも、歌手として人気のあるバウルになることだとしても、それは不思議なことではありません。

六　シャンティニケータンの観光地化

一九六一年、タゴールの生誕百年祭が、ヴィシュヴァ・バーラティ大学を中心に、ボルプール・シャンティニケータン地域で盛大に行なわれました。それを記念して、タゴールが晩年を過ごした大学構内の邸

宅（ウッタラヤン）が一般公開されるようになりました。また、邸宅に保管されていた直筆の原稿、自身が描いたデッサンや絵画、書簡、邸宅を訪問した客人との記念写真、受けとった贈り物など、すべての遺品を展示するための博物館が、ウッタラヤンの敷地内に開設さました。さらに、大学から程近い場所に、西ベンガル州政府直営の「シャンティニケータン・ツーリスト・ロッジ」が開設されました。それは、この地域で最初の一般観光客用の本格的な宿泊施設です。「タゴールのシャンティニケータン」は、重要な観光資源だと考えられたのです。

シャンティニケータンの観光地化にともなって、ヴィシュヴァ・バーラティ大学周辺に、民間経営のロッジや土産物店がつぎつぎと開店しました。大学主催の「ポウシュ月の祭典」や「マーグ月の祭典」が開催中でなくても、インド人観光客でにぎわうようになったからです。

「シャンティニケータン」という地名は、「平和の郷」という意味で、そのひびきのよい名前は、インド人だけでなく、外国人にもアピールしたようです。一九六〇年代後半から、ヴィシュヴァ・バーラティ大学に外国人留学生が増えてきました。また、自由な旅行を楽しむ外国人バックパッカーも増えてきました。アメリカやヨーロッパで、英語版の「地球の歩き方」のようなガイドブックが、つぎつぎと出版されました。欧米や日本などの先進的産業社会では、体験型の海外旅行ブームがおこったのです。

インドは訪問国として若者に人気がありました。それには、ビートルズのジョージ・ハリソンがインド

のシタール奏者ラヴィ・シャンカールに弟子入りしたことや、シンガーソングライターのボブ・ディランがプールノ・チャンドロ・ダシュとアメリカ各地で共演し大成功をおさめたことなどが、大きく報道されたことも影響を与えたのかもしれません。

七　マドゥコリのパターンの変化（その一）

バウルは、人家の門口でバウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えて、マドゥコリをして生活費を稼いでいます。それは、ベンガルの村の、「ベンガル人の家の門口」でのことでした。しかしバウルは、一九七〇年頃から、ヴィシュヴァ・バーラティ大学のホステルに住む外国人留学生や[14]、ツーリスト・ロッジに滞在する外国人旅行者も訪問するようになったのです。彼らは、外国人にバウルの歌をうたって、金銭を要求するようになったのです。

さらにバウルは、やはり一九七〇年頃から、人家の門口でマドゥコリをするだけなく、列車の中でも歌をうたって稼ぐようになりました。乗客には、バウルの歌を求めるインド人観光客や外国人旅行者も少なからずいたからです。

列車のなかで歌をうたって稼ぐことの利点は、天候に左右されず、きびしい夏期や雨期にも容易に行えることです。ベンガルの夏には、「ルー」とよばれる熱風が何日もつづきます。手に触れるものは、すべ

て熱く感じられます。雨期になれば、すこしは涼しくなります。しかし雨期には、ときには川があふれ、道が流されます。夏期や雨期は、村にマドゥコリに行くのが困難な時期なのです。

しかし、この利点にもかかわらず、バウルのおおくは、列車のなかで歌をうたって稼ぐよりも、村でのマドゥコリを好むようです。その理由のひとつは、列車のなかは、いつもざわざわした雰囲気にあるからです。バウルが歌をうたっていても、さまざまな物売りが大声をはりあげて、混んだ車内をとおりすぎてゆきます。そこは、演奏者のバウルにとっても、聴衆の乗客にとっても、十分な環境ではありません。

もうひとつの理由は、そこでは、バウルが不特定多数の正体不明の乗客を相手に歌をうたわなければならないことにあります。このことは、ボルプール駅裏手のＳ地区に住むＢＤＢの証言によくあらわれています。

「おおぜいの乗客のなかには喜捨をしたくない人もいるでしょう。それでもその人は人目を気にして、二〇パイサか二五パイサの小銭を与えるでしょう。しかし、わたしがどこかの村のだれかの家の中庭でうたっている姿を想像してごらんなさい。そこには数人の聴衆しかいないけれど、彼らはわたしの歌をじっと聴いてくれる。そして、わたしの歌に満足した村びとは、一握りの米をよろこんで与えてくれます。それは、列車のなかの不本意な小銭よりもはるかにうれしい」。

バウルは、列車の無賃乗車を黙認されています。しかし、無賃乗車を黙認されているのはバウルだけで

はありません。乞食や物売り、そして世捨て人も無賃乗車を黙認されているのです。

村でマドゥコリをするバウルは、経文を唱えて物乞いをするボイラギ（ヴィシュヌ派の出家修行者）やファッキール（イスラム神秘主義の行者）などと同様に、世捨て人の範ちゅうの人間です。しかし、列車のなかで歌をうたって稼ぐバウルを、一般の乗客はどのようにみているのだろうか。バウルは小銭を求める乞食なのか。それとも、歌の押し売りをする物売りなのか。

八　インドの経済危機と経済政策の転換

一九九〇年八月のイラクのクウェート侵攻がきっかけとなり、九一年一月に湾岸戦争が始まりました。この影響で原油価格が高騰しました。また、中東に出稼ぎに出ていたインド人労働者からの送金が止まりました。この結果、インドは外貨準備が輸入の約二週間分にまで減少するという深刻な国際収支危機に陥ったのです。

一九四七年の独立以降、社会主義型経済により国内産業の保護を優先してきたインド政府は、一九九一年から経済自由化路線へ変更する経済改革を開始しました。具体的には、国内における産業規制の緩和や、貿易・諸外国からの投資の自由化を進展させ、高い経済成長の実現を目ざす政策です。

一九九一年以降の経済改革が功を奏し、一九九二年以降のインドの国内総生産（ＧＤＰ）は順調に伸

展しています。一九九三年から二〇〇三年のインドの平均経済成長率は五、九％ですが、同じ時期の日本の成長率は一、二％ですので、インドが着実に経済成長を続けているのがわかります。とくに経済改革の成果が明らかになってきたのは最近のことで、過去五年間のインドの経済成長率は八％におよび、近年さらに九％台に加速しています。

つぎの「表1」は、NCAER（インド国立応用経済研究所）による、「インドの所得別世帯構成の推移」を示したものです。

「表1」をみると、経済成長にともない年間の世帯収入が四万五〇〇〇ルピー以下の低所得層が減り、年間の世帯収入が九万ルピー以上の中所得層以上の占める割合が、一九八五年度の九、五％から二〇〇一年度には二八％まで拡大しています。「表1」にはありませんが、中所得層以上の割合は、二〇〇五年度ではさらに三四、五％にまで拡大しており、いわゆる中間層が増大していることがわかります。インドというと、物乞いをする

	1985	1989	1992	1995	1998	2001
低所得層 （～ 45,000 ルピー）	65.3	58.9	58.2	48.9	39.8	34.6
下位中所得層 （45,001 ～ 90,000 ルピー）	25.2	26.9	25.4	30.7	34.5	37.3
中所得層 （90,001 ～ 135,000 ルピー）	6.9	10.1	10.4	11.9	13.9	13.9
上位中所得層 （135,001 ～ 180,000 ルピー）	1.5	2.7	3.7	5.0	6.2	6.8
高所得層 （180,001 ルピー～）	1.1	1.4	2.3	3.5	5.7	7.3

表1　インドの所得別世帯構成の推移（単位は％）

子どもの姿がテレビ映像で流されることが多いため、「貧困」というイメージが強かったのですが、人びとの生活は着実に豊かになっているのです。事実、自動車や二輪車、家電製品などの購入も増えていますし、携帯電話、パソコン、インターネットの利用も急速に伸びています。

九　急速な物価の上昇

急速な経済成長は、物価の上昇をともないます。つぎの「表2」は、一九八八年と二〇〇七年の物価や流通貨幣の種類を比較したものです。

関西空港からコルカタ行きの飛行機は、どの航空会社も深夜着です。ホテルの予約をする習慣のないわたしは、空港からプリペイド・タクシーを利用して、市内の安ホテル街サダル・ストリートに直行するのが常です。空港のプリペイド・タクシーなので、法外な運賃を請求されることはないのですが、それで

	1988	2007
コルカタ（空港－市内）の prepaid-taxi の運賃	Rs.60.00	Rs.250.00
鉄道運賃 (Howrah–Bolpur, 159 ㎞ , Express, 2nd Class)	Rs.18.00	Rs.48.00 (2002 年改定)
米１キロの値段	Rs.4.00	Rs.22.00
流通紙幣の種類	1,2,5,10,20,50,100 (rupee)	10,20,50,100,500,1000 (rupee)
流通硬貨の種類 (1 paisa = 1/100 rupee)	5,10,20,25,50(paisa) 1(rupee)	50(paisa) 1,2,5(rupee)

表２　インドの物価と流通貨幣の比較

も運賃は毎年確実に上がっているのを実感します。約一時間でサダル・ストリートに着きます。途中、運転手との雑談のなかで、米一キロの値段を聞くことにしているのですが、一九八八年には四ルピーだったのが、二〇〇七年には二二ルピーということでした。米の値段を市場で確認しているので、運転手の言うことは、毎年ほぼ間違いありません。それにしても、米一キロの値段が、二〇年間で五倍以上にもはね上がっているのです。一九九一年の経済改革以降、人びとの生活は着実に豊かになったといわれています。しかし、「表1」の年間の世帯収入が四万五〇〇〇ルピー以下の低所得層というのは、一日の収入が一ドル未満の「絶対的貧困層」に当たる人びとで、二〇〇一年には、まだ全人口の三四、六％にも及んでいます。急速な物価の上昇は、貧困層を直撃しているのです。

十　マドゥコリのパターンの変化（その二）

バウルは、一九七〇年頃から村でマドゥコリをするだけでなく、列車のなかでも歌をうたって稼ぐようになりました。しかし、一九九〇年代の中頃から、列車で稼ぐバウルがめっきり少なくなりました。そして二〇〇二年から、車内で稼ぐバウルをまったく見かけなくなりました。

バウルが村でマドゥコリをする場合、喜捨として受けとるのは、米や季節の野菜などの「現物」です。それに対し、列車内でうたって稼ぐバウルが受けとるのは、もっぱら「現金」です。

一九八〇年代まで、インドのローカル列車に乗ると、ポケットには二〇パイサや二五パイサの小銭がいくつも必要でした。つぎつぎと来るバウルや乞食、床を清掃する少年などに与えるために必要だったのです。ところが、一九九〇年代中頃から、流通する紙幣や硬貨が高額になってきました。一九八八年には流通していた五パイサ、一〇パイサ、二〇パイサ、二五パイサの硬貨がなくなりました。五〇パイサ硬貨はまだ流通していますが、市場ではほとんど見かけなくなりました。物の値段の最低額は、現在では一ルピーです。しかし、乗客はバウルや乞食に「一ルピー硬貨」を与えるのはためらうようです。人びとは、まだ、かつての「一ルピーの価値」を記憶しているのです。結果として、バウルや乞食を無視する乗客が増えました。この傾向は、もっぱら列車で歌をうたって稼いでいたバウルには打撃だと思います

バウルや物売りは、列車の無賃乗車を黙認されていました。しかし二〇〇二年から、車内の物売りには営業許可証が必要となりました。そして、車内で歌をうたって稼ぐバウルの無賃乗車も黙認されなくなりました。車内で歌をうたって稼ぐことは、「営業行為」とみなされるようになったのです。バウルは、インド人観光客や外国人旅行者の利用する昼間の急行列車には乗らなくなりました。列車で稼ぐのは、割に合わない仕事になったのです。結果として、バウルは村でマドゥコリをする回数が増えました。

村へマドゥコリに行くために列車を利用するバウルは、乞食や世捨て人と同様に、あいかわらず無賃乗車を黙認されています。バウルが利用するのは早朝の普通列車です。検札官は、「チケットはもっているか」

と、一応は問い聞くようです。しかし、バウルが「マドゥコリをして食べているので、チケットを買うことができない」というと、黙認してくれるとのことです。

十一　別荘とリゾートホテルの建設ラッシュ

一九八八年当時、シャンティニケータンの北一キロ、プランティック駅の西側は、広々とした野原でした。ところが、一九九〇年代後半になると、野原は宅地造成され、コルカタ在住の富裕層の別荘がつぎつぎと建てられました。いずれも豪邸です。また、大資本の開発による分譲邸宅もつぎつぎと売りだされました。たとえば、二〇〇五年に第一期工事がはじまり、二〇〇七年に第二期工事が完了した一八〇棟からなる「ショナル・タリー」（「黄金の船」の意）の守衛によると、家主はコルカタ、デリー、ムンバイなどの大都市の富裕層で、なかには映画スターも入居しているようです。ただし、家主はこれらの邸宅を別荘として使用しており、常時住んでいるわけではありません。しかし、邸宅の管理や手入れをする使用人やメイドが住む別棟の小屋があり、常駐しています。

また、一九九〇年代後半になると、シャンティニケータン地域には、高級リゾートホテルがつぎつぎと建てられました。その数は二〇をこえます。一泊三〇〇〇～四五〇〇ルピーの超高級ホテルから、一泊一〇〇〇～一五〇〇ルピーの高級ホテルまで、種類はさまざまです。これらのリゾートホテルは、

一九六〇年代から八〇年代に建てられた、一泊一〇〇ルピー前後の、宿泊だけのツーリスト・ロッジとは性格が異なります。休日をシャンティニケータンの別荘や高級リゾートホテルですごす新興富裕層が増えているのです。観光地シャンティニケータンが高級化しているのです。

十二　観光客相手の音楽チーム

一九五〇年代から六〇年代にかけて、いち早くプロの音楽家の道を歩むようになったのは、音楽的技量に卓越した一部のバウルにかぎられていました。しかし、一九九〇年代の中頃から、ボルプール・シャンティニケータン地域に住む「ごくふつうのバウル」も、気の合った仲間と音楽チームを編成するようになりました。シャンティニケータン地域につぎつぎとできた新富裕層の別荘やリゾートホテルから、演奏を依頼されることが増えたからです。バウルは、村にマドゥコリに出かけるときは単独行動なのですが、演奏の依頼を受けると音楽チームを組むのです。

シャンティニケータンのSP地区のGDBも、そのような音楽チームに所属しています。音楽チームは五人編成で、リーダーは、一九九〇年代にSP地区に移住してきたBDBです。メンバーは、BDBとGDBのほかに、タブラ（北インドの一対の太鼓）奏者、バーンシ（竹の横笛）奏者、そしてハルモニウム（箱形の手押しオルガン）奏者です。このうちバウルは、BDBとGDBで、楽器演奏だけでなくボーカルも

担当します。あとの三名は音楽愛好者で、ほかに職をもっています。しかし、演奏依頼があると、全員がバウルの衣装を着用して出かけます。観光客相手の音楽チームには、しばしば「バウルもどき」が紛れ込んでいるのです。

ＢＤＢとＧＤＢは、詩人タゴールで有名なシャンティニケータンを訪れた外国人観光客や、遠来の客をもてなす金持ちのベンガル人に請われて、ときどきバウルの歌をうたうことがありました。また、ほかの音楽チームのパートタイムのメンバーとして、別荘やリゾートホテルで演奏することもありました。しかし彼らは、二〇〇〇年頃から、別荘の管理人やリゾートホテルのマネージャーから、「自分の音楽チームをもっていますか」とか、「全部込みで演奏料はいくらですか」とかの問い合わせを受けるようになったのです。たぶんＢＤＢとＧＤＢの人柄が好印象を与えたのでしょう。こうして、ＢＤＢの提案で、聴衆のリクエストに柔軟に対応できるように、タブラ、バーンシ、ハルモニウムの奏者を加えて、観光客相手の五人編成の音楽チームが誕生したのです。彼らは、観光客相手の演奏の仕事のことを「プログラム」とよんでいます。

リーダーのＢＤＢは、自宅に看板を掲げ、名刺をつくり、シャンティニケータンのリゾートホテルのマネージャーや別荘の管理人に挨拶回りをしました。二〇〇五年には携帯電話にも加入しました。彼の営業活動は功を奏し、演奏依頼も徐々に増えているようです。

ＢＤＢの音楽チームは、繁忙期の休日には一日に数カ所からの演奏依頼を受けることもありますが、閑散期には月に二～三回のこともあるようです。それでも平均すると、週に一～二度の演奏依頼を受けるといいます。ＢＤＢの五人編成の音楽チームの出演料は、二時間の演奏で平均一〇〇〇ルピーです。出演料は各メンバーに平等に分配されます。しかし、リーダーのＢＤＢには、依頼者から一〇〇～三〇〇ルピーの祝儀が、別途に渡されることがあります。また個々のメンバーにも、演奏を気にいった聴衆から二〇～五〇ルピーの祝儀が渡されることがあります。それらの祝儀は、受けとった者のものになることは、メンバー全員の了解事項です。

十三　「一〇ルピー・バウル」の稼ぎ（一九八八年）

シャンティニケータンのＳＰ地区に住むＧＤＢは、自分のことを「一〇ルピー・バウル」とよんでいました。彼はわたしの隣人のひとりでした。ＧＤＢが自分のことを「一〇ルピー・バウル」とよぶように、彼の稼ぎは、その日によって変動はあるものの、おおよそ一日に一〇ルピーでした。つぎの「表3」は、一九八八年一月一日から一二月三一日までの、一年間の彼の稼ぎをまとめたものです[vii]。喜捨として受けとった米や季節の野菜などの現物は、市場価格に換算しルピーで表示しました。また、マドゥコリをした日の夕方に歌を要請された日などは、両方を一日と計算しました。

十四　バウルの二十年後の稼ぎ（二〇〇七年、概算）

さて、バウルの二十年後の稼ぎを、シャンティニケータンのGDBを例に概算してみましょう。

GDBは、現在でも週に三日は村にマドゥコリに出かけるといいます。これを概算すると、彼は年間に一六五日マドゥコリに出かけたことになります。そして、彼が村で一日マドゥコリをすると、村人からの喜捨として、米二～三キロ、季節の野菜一～二キロを受けとるといいます。二〇〇七年の市場価格では、米一キロの値段は二二ルピー、季節の野菜一キロの値段は、平均すると、おおよそ米の半額です。GDBの一日のマドゥコリで得た喜捨を、市場価格に換算して概算すると、七一ルピー五〇パイサ（Rs.71.50.-）ということになります。つまり彼は、マドゥコリで年間一万一七九七ルピー五〇パイサ（Rs.11,797.50.-）稼いだことになります。彼が村

方　法	日　数	収入（ルピー）
村や町でのマドゥコリ	125	1445.80
列車でうたって稼ぐ	64	615.70
村や町でのマドゥコリと列車での稼ぎ	13	215.00
祭りやメラへの参加	16	72.00
演奏会への参加	10	60.00
要請によりうたう	8	539.00
その他	25	280.00
休日	117	0
合　計	378	3227.50

表３　GDBの経済活動（1988年）

人から喜捨として受ける米や季節の野菜などの「現物」の価値は、物価の上昇に影響されません。バウルは、村でマドゥコリをするかぎり、貧しいながらも何とか生活できるのです。

ＧＤＢは、週に一～二回、プログラムに出演するといいます。これを概算すると、彼は年間八三回のプログラムに出演したことになります。彼は一回のプログラムで、平均すると二〇〇ルピーの出演料を受けとります。したがって、年間のプログラムの出演料として、一万六六〇〇ルピー（Rs.16,600.00.-）稼いだことになります。

バウルは、数年前から列車のなかで歌をうたって稼がなくなりました。その理由は、すでに述べたように、列車で稼ぐのは、割に合わない仕事になったからです。さらにバウルは、メラや祭りに参加しなくなりました。それは、ベンガルで主要なメラや祭が行われるのは、秋の稲の収穫がおわり、もっとも気候のおだやかな霜期と冬に集中しているからです。その時期は観光シーズンで、観光地となったシャンティニケータン地域の繁忙期です。したがって観光客相手の音楽チームを編成しているバウルには、割に合う仕事が殺到する時期でもあるからです。

ＧＤＢが、村にマドゥコリに出かけなかった日や、プログラムに出演しなかった日を休日とみなすと、それは年間一一七日となります。週休二日のペースは、二〇年前と変化していません。

ＧＤＢのマドゥコリとプログラムによる稼ぎは、不確定要素のおおい祝儀を除いて概算すると年間

二万八三九七ルピー五〇パイサ（Rs.28,397.50.-）となります。これらの概算をまとめると、つぎの「表4」のようになります。「表4」は、「表3」のように、日々の稼ぎを集計した厳密なものではありません。あくまでも概算です。

十五　バウルの適応戦略

今までの議論を整理しながら、「表3」と「表4」を比較すると、インド社会の急速な経済成長にともなうシャンティニケータン地域の観光現象に対する、バウルの適応戦略がうかびあがってきます

まず気づくのは、バウルにとって、マドゥコリで生活することの重要性です。マドゥコリの生活は、ひとりの人間が「バウルになる」ためにも、また「バウルである」ためにも不可欠の要件です。これは彼らが選んだライフスタイルです。

バウルが村人から喜捨として受けとるのは、米や季節の野菜などの「現物」です。「現物の価値」は、インド社会の急速な経済成長にともなう物

方　法	日　数	収入（ルピー）
村でのマドゥコリ	165	11,797.50
プログラムに出演	83	16,600.00
列車でうたって稼ぐ	0	0
メラや祭への参加	0	0
休日	117	0
合　計	365	28,397.50

表4　GDP の経済活動（2007 年、概算）

価の上昇に影響されません。バウルは、村でマドゥコリをするかぎり、生活の基盤は脅かされないのです。

「表3」と「表4」をみると、GDBの二〇〇七年の稼ぎ（Rs.28,397.50.-）が、一九八八年の稼ぎ（Rs.3,227.50.-）に比べ、八、八倍になったことがわかります。この期間の米一キロの値段が、一九八八年の四ルピーから二〇〇七年の二二ルピーへと五、五倍の上昇なので、彼の稼ぎは物価の上昇を上回っています。これは、別荘やリゾートホテルで観光客相手のプログラムという、割に合う仕事が増えたからです。

観光客が求めているのは、シャンティニケータンの別荘やリゾートホテルで、バウルの歌や音楽を聴いたり、バウルの演奏で踊ったりして、家族や友人と楽しむことです。バウルもそのことを十分に承知しています。バウルは、観光客相手の音楽チームを組織するときに、聴衆のリクエストに柔軟に対応できるように、バウルではないタブラ奏者やバーンシ奏者、ハルモニウム奏者を加えました。彼らが演奏するのは、バウルの歌や音楽とはかぎらないのです。しかし、演奏依頼があると、メンバー全員がバウルの衣装を着て出かけるようにしました。これは、一般のインド人が、「バウルの歌や音楽は、ベンガル民俗文化の不可欠の部分」というイメージをもっているからです。観光客が求めているのは、私服を着たミュージシャンではないのです。バウルは、そのことを知っています。バウルは、インド社会の急速な経済成長にともなうシャンティニケータン地域の観光現象に対して、「バウルの衣装を着た音楽チーム」を組織するという方法で適応しているのです。

十六　おわりに

バウルは、マドゥコリの生活を採用し、「バウルになる」ことによって、人生の危機を乗りきることができました。マドゥコリの生活は、個人の選択肢が制限されたカースト社会における、選択可能な「もうひとつのライフスタイル」です。

一九五〇年代から六〇年代にかけて、いち早くプロの音楽家の道を歩むようになったのは、音楽的技量に卓越した一部のバウルにかぎられていました。しかし、一九九〇年代の中頃から、ボルプール・シャンティニケータン地域に住む「ごくふつうのバウル」も、気の合った仲間と音楽チームを編成するようになりました。シャンティニケータン地域につぎつぎとできた新富裕層の別荘やリゾートホテルから、演奏を依頼されることが増えたからです。バウルは、村にマドゥコリに出かけるときは単独行動ですが、演奏の依頼を受けると音楽チームを組むのです。そして、バウルではないメンバーもバウルの衣装を着て出かけるのです。

バウルは、インド社会の急速な経済成長にともなうシャンティニケータン地域の観光現象に対して、「バウルの衣装を着た音楽チーム」を組織するという方法で適応しているのです。しかし、バウルにとって、マドゥコリで生活することの重要性は変化していません。

注

i　インド古代の法典では、上位三階級であるバラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャの生涯を、学生期、家住期、林住期、遊行期の四住期に分け、これら四段階を順次に経るものとされ、各段階に厳格な義務が定められている。ただ、この制度が実際にどの程度まで忠実に履行されたかは疑わしく、現在では、特殊なバラモン階級をのぞき、家住期のみが実践されている。

ii　ヴェーダの祭式は、王侯や司祭階級バラモンの独占するところであり、ウパニシャッドに説かれる「梵我一如」の思想は、知的エリートにのみ可能であった。しかしバクティの概念により、女性や低カーストの男性も救済可能となった。その後、人間の努力の価値を否定し、ただひたすら神に身をゆだねることこそが、バクティにほかならないとする考えがしだいにつよくなり、中世インドのいわゆるバクティ運動を濃厚に彩ることになった。

iii　「人間の肉体は、真理の容器」というバウルの信仰を整理すると、ふたつの原理に分解できる。（一）人間の肉体は、宇宙にあるひとつの「もの」であるだけでなく、宇宙の「縮図」である。（二）人間の肉体は、神の「住処（すみか）」であるばかりでなく、神を実感するための唯一の「媒介物」である。つまりバウルは、人間の肉体を小宇宙とみなし、みずからの肉体に宿る神と合一するために、みずからの肉体を駆使して「サドナ」とよばれる宗教儀礼を実践するのである。

iv　ベンガルのバウルのライフヒストリーについては、拙稿［村瀬　一九九九、二〇〇〇］を参照。

v　*Purna Chandra Das (1935-)*。一九五四年、彼は「アカシバニ」（インド国営放送のベンガル語名）に出演し、その傑出した歌唱力で一躍有名になった。彼はその後、インド国内だけでなく海外にも活動の場を広げ、ソ連（当時）、アメリカ、ヨーロッパ、日本など世界各地で公演を行っている。

vi　一九七二～七四年に、ヴィシュヴァ・バーラティ大学に留学したタケウチ・ワクは、バウルの突然の訪問を受けたときの印象を報告している［*Takeuchi 1976: 28-36*］。

vii　GDBの一年間の稼ぎの分析については、拙稿［村瀬　二〇〇九］を参照。

参考文献

村瀬　智

一九九九　「バウル群像　ベンガルのバウルのライフヒストリーの研究（一）」『大谷女子短期大学紀要』四三号、一一三―一三七頁。

二〇〇〇　「バウル群像　ベンガルのバウルのライフヒストリーの研究（二）」『大谷女子短期大学紀要』四四号、四五―九三頁。

二〇〇九　「ベンガルのバウルの文化人類学研究（三）」『大手前大学論集』第九号、二五三―二七三頁。

Takeuchi Waku

1976 'Affected by the Wind: Meeting with the Bauls.' The Kyoto Review. No. 8, pp. 28-36.